

郷土の先人

亀山雲平 ①

「国家一旦の用を待つ」 人材養成に尽した偉大な

幕末のころ、姫路藩に、
亀山雲平という偉い学者
がいた。

明治になつて、この先
生が、松原神社の宮司と
して、白浜村へやつて來
て、一般の人々に学問を
教えた。この学舎を「觀
海講堂」といつた。そし
てこの学舎で学んだ、吉

田豊吉、岡田重成、中川
栄次郎の息子たちが、父
が学んだ雲平の教えをよ
く守り継いで、世に羽ば
たいていった。

吉田豊信は、姫路市長

となり、県下第二の都市

となり、
社会に役立つ人材の養
成を第一の目標とした雲

平は、十一歳で藩校の好
古堂に入學し、次いで河
合寸翁創立の仁寿山校に
進学、江戸幕府官学の昌
平坂学問所を首席で卒業
し、二十年に及ぶ學業に
専念した学者であり、教
育者である。そしてハリ
マの地に大きな足跡を残
していった。



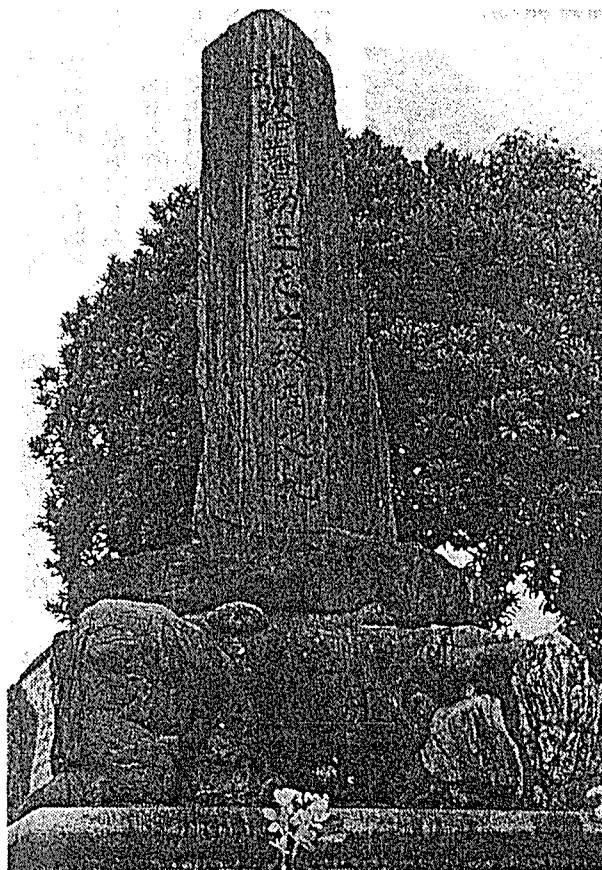
亀山雲平先生像

を築きあげた功労者であ
る(前年逝去)。岡田武彦
は、文学博士、九州大学
名誉教授となり九十五歳
の現在も大活躍をされて
いる。中川清は、芸名・
桂米朝として、日本落語
界の重鎮であり、人間国
宝の身であり、現在も盛
んに活動されている。

このように、亀山雲平
の門下生達の中から続々
した。

文・長野哲(亀山雲平顕彰会)

45・0015



大蔵前公園にある勤王志士の碑

文・長野哲（亀山雲平顕彰会） 45・0015

当時の掛官は勤王志士を、頭から金員死罪を実行しようとした。この時亀山雲平は正道を守りて動ぜず、苟しくも、人を裁くに、罪の軽重を論せず、死罪に處すとは言語道断であると反論してゆるらず、侃々諤々、大論争を開いて、軽輩下士の罪を軽くし、死刑を取り止め入牢を申し渡して助

郷土の先人

亀山雲平 ②

元治元年（一八六四）姫路藩、勤王派の諸士を裁判にかけ、全員重罪とし

て、一律に死刑にしようと裁決した。この時亀山雲平は恰も藩の重役「大

目附」であった。そしてこの裁決の場に臨んでいた。

明治三十二年（一八九九年）亀山雲平が逝去したとき、東京の旧姫路藩主酒井侯の「名代」として会葬に来た、近藤薰氏は、観海講堂の柩に額づき「ハラハラ」と涙を流して、私の今日あるのは「アノ時」亀山先生が甲子の年に助けてくれたお蔭である。正に命の恩人であると、当時の模様を話してくれたという。

近藤薰は明治になり、衆議院議員、兵庫県議会議院初代議長を務め、更に姫路市に第三十八国立銀行を設立して、旧藩士や一般市民のため大いに社会に貢献した人である。

勤王派志士を死罪から救う 近藤薰_{兵庫県議会「命の恩人」と感涙 初代議長}

郷土の先人

亀山雲平 ③

渡し場人足の悪習慣を改める

明治の初め頃、市川には橋がなく、川を渡るには必ず渡場人足に頼つて川を渡してもらつていた。或る日、阿保の渡場で亀山雲平が姫路から、松原村

へ帰るとき、昨日の雨で市川の水かさがあがり、流れが早やなつていた。こんな時「キマツテ」強要されるのは、川越人足の酒手(チップ)要求で

あつた。

人足は雲平の風ティを見て、方外な渡貢をブツかけてきた。雲平のお供が「先生、それは、無茶な報酬です」と言つて、断るようにと進言したが、雲平は素直にその言分を聞いて貨銀を払つた。人足は、シメシメと得意顔になり、他の人足達に触れまわつた。

ところが、この人は有名な亀山雲平という、大先生であり旧姫路藩の大目付で、藩校好古堂の筆頭教授であったということが聞き、「ビックリ」驚天。村の役人に付添われ

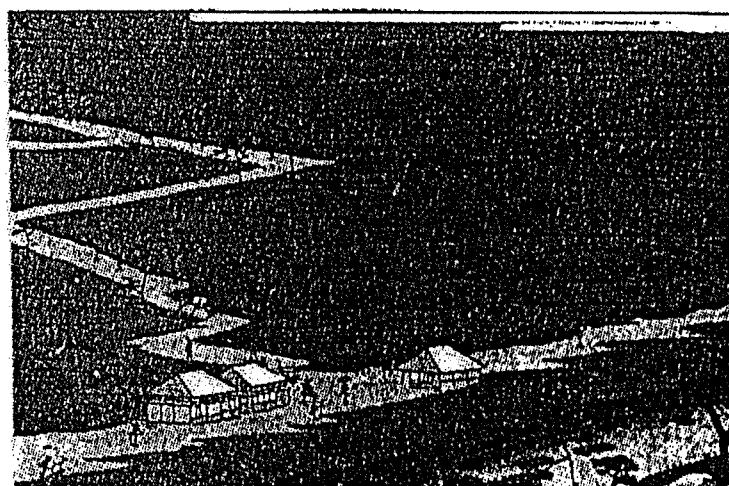
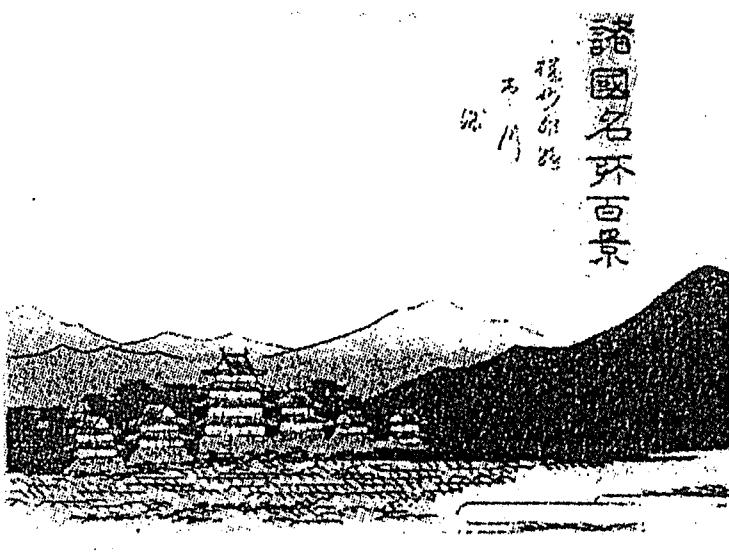
て、松原の観海講堂へやつてきて、昼間の非礼を深く詫び、強要した五十銭銀貨を差出した。

雲平先生は「イヤイヤ

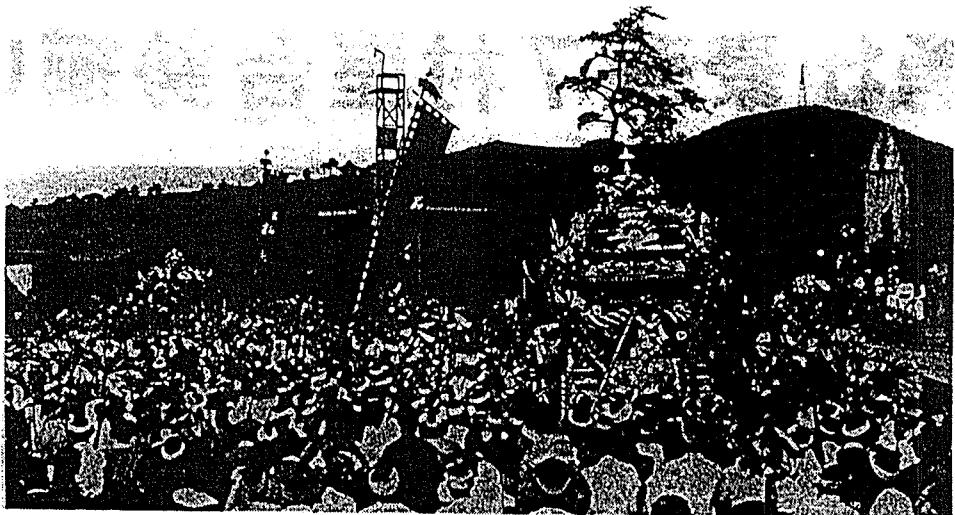
今日は大変危険なときに送つていただき、お世話になつた」と改めて札をいい、お金をどうしても受取らなかつた。

付添の役人と人足二人は、平身低頭して、雲平先生邸を後にした。先生は、去つて行く二人の後姿をうなずきながら見送つていた。

そんなことがあつてから、市川の三渡場(市ノ郷、阿保、阿成)人足の「マナー」が良くなり、和かな川渡り風景が、橋の出来るまで続いたといふ。



市川の渡し(広重画)



1958年の「灘まつり」

騒がしい声が、この南の土地（神社の楼門の前広場）に響きはじめる。つて「ヤッサ」の動きにつれて、雜踏の土ぼこりが舞いあがっている。暫くの間に、多勢の人々で一杯になつて、ますますひどく、裸の男たちが動き廻つて、更に強さを競っている。

そしてかすかに、社殿

闇くと、女連れの人々があわてふためき、ひしめきて逃げ出していく。今年は米も豊作だといつて、「ヤッサ」の動きにうでの、人々の酒樽には遠慮なく口を出している。（ヤッサの通る道筋の家々の玄関に酒の樽やバケツに一杯酒を入れ、一般の人達にふるまつて）まだ太鼓の音や騒ぐ声が包まれていて。

出張して来ている官吏達は取締まりに懸命である。三々五々見物客は帰つて行き、夜十時過ぎても、月が出て露店はまだ一杯立ち並んでいる。日暮れで、七人の村人たちの帰るのに出来ない。目も耳もまつ赤に血まみれの大ケガをしていた。

祭りの方から雄鶴な「笛の笛」の音が聞こえ、三名の「ミコシ」が練出され、「ミコシ」は何度も行きつてしまつて、立った鹿、険しい山道を走つしながら動いて行く。甲の「ミコシ」は倒れようとしている。この「ミコシ」は既に倒れかかっていて、東から西から竹竿（けんざ）で支えられて立つたり倒れたりしが、ぶつかりあつたり、どうり合つたりする組を

おつかり九月、やや涼しい季節に、人々は淨化粧をして、どの家々もきれくなになつていて、この邊の入江（木場港、松原港、妻鹿港）の底子の村々では、老幼男女、みんな淨き淨きとしている。おわらまな色が回じる三尺の布は、元氣盛の若衆の頭髪をまとめている。（鉢地）

の方から雄鶴な「笛の笛」の音が聞こえ、三名の「ミコシ」が練出され、「ミコシ」は何度も行きつてしまつて、立った鹿、険しい山道を走つてしまつて、立つてしまつたのか。これを登つてくと漸くいくぞつする。社殿には多くの供え物が奉納されている。夕闇が既に頃頃、これから腰に提げた瓢箪の酒を飲み尽くすのだ。帰途につくと皆すっかり気が弛んで、姫路から

お旅所では、英気が溢れていて、まだまだ騒がれていて、安否を気遣う、じつといじゆうわけじうなつてしまつたのか。因脚が一つの風箇となつてしまつたのだ。祭りに際しては恭しく礼物の限りを尽くすけれども、鬼モジのよくな荒々しいふるまいをどうして好んで受けよう。西洋にもこのような事があると聞く

お旅所では、英気が溢れていて、まだまだ騒がれていて、安否を気遣う、じつといじゆうわけじうなつてしまつたのか。因脚が一つの風箇となつてしまつたのだ。祭りに際しては恭しく礼物の限りを尽くすけれども、鬼モジのよくな荒々しいふるまいをどうして好んで受けよう。西洋にもこのような事があると聞く

祭りの諸行事が明日の活力に配してもせひ泣きながら、遠ざかっていた龜山雲平の見た「灘祭り」の光景の批評は非常に厳しい採点である。松原神社の宮司となって、三年目（明治九年一八七六年）の祭りの模様を記録している。

ケガ人や死人の出ない、安全で楽しい灘祭りのやりかたを心の底から希望していたのである。したがって、雲平の数千点の作詩、作文の中に「タツタ二篇だけ灘祭りの文章があるのみ。

亀山雲平さんの見た「灘まつり」

126年前（明治9年）のまつり模様

みんな浮き浮き 道筋では酒の接待

災厄を免れよといして、神を祀りながら、自分で炎火を抱じている。拳を以て人を殴り、「君子」を呼ぶとは、ああ嘆かわしくも、また哀れなことである。と。

ハリマ一円の教導職の最高の地位「少教正」として教育の指導者として、派手、荒々しい、無法な行為を支持出来なかつたのである。然し無暗にこの長き伝統のあり方を変えることは不可能であることもよくわきまえていた。唯ひたすらに安泰にこの祭りの諸行事が明日への活力になるように祈つていたのであった。

郷土の先人

亀山雲平 ⑤

殿(介)、丹羽久米(介)、三人共「スケ」が付くので「三介」といった。

亀(山)雲平、春(山)弟彦、庭(山)武正、三人共

「山」が付くので「三山」といった。

今回独協大の学究の徒に依り、寸翁・雲平の遺品、

遺墨、写真など数多く展

示陳列されていて圧巻であつた。

亀山雲平は、河合寸翁が藩主の命を受け一八二六年、大手前に移転大拡張した新好古堂、ついで寸翁の創立した仁寿山

校で学んだ。大學頭林述堯が姫路に来たとき、寸翁は丁重に

校好古堂教授になつて、

河合寸翁のゆかりの藩士達を教えたのであつた。

この寸翁、雲平の両者が今回志湧会祭の催し会場で並んで展示されるのを見て、なにか不可思議な気がしてならない

つた。

そして思いもしなかつた亀山雲平の墓の碑文銘の拓本を見て「びっくり」、その美麗さにみどりてしまつた。

喜多、坂口、岡本、水村さんたちの熱心な努力の賜と敬眼させられてしまつた。

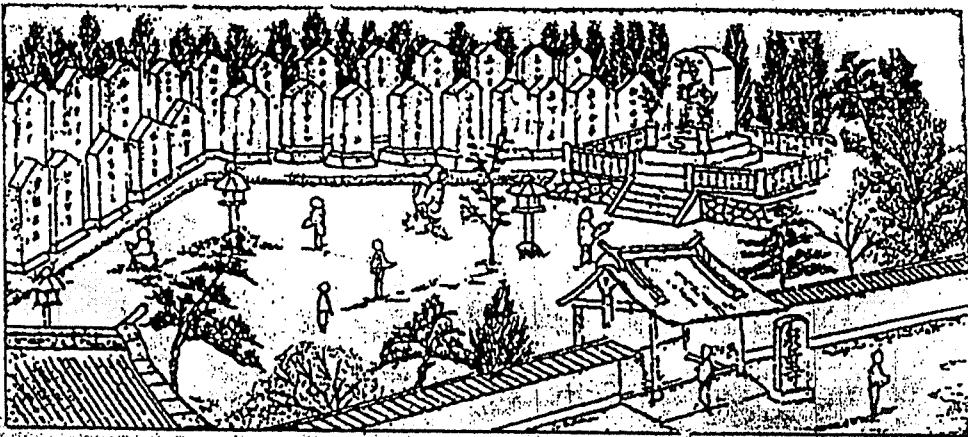
文・長野哲(亀山雲平顕彰会 45・0015)

寸翁の展示が一ぱいで、貴重な研究資料は見ごたえのあるものばかりであった。

今まであまり知られていなかつた亀山雲平の関係資料が、大学の大会場で公開されたことは、洵によろこばしい出来事である。

雨の降る中を大勢の人々が続々とつめかけ、各会場を見て廻つていた。外では多くのテントのバザーも超満員、みんな楽しそうに大きな口を開けうまそうに食べていた。バンドも雨の音をかき消すかのように、ロックを演奏していく、賑やかであり、学園祭の景気を一段ともりあげていた。

隣りのコーナーは河合



郷土の先人

龜山雲平⑥

其位ヲ占タ四十六士ノ
内一癡アリ四十六士ノ
木像アリ安ス然レビ粉飾
已ニ剝落シ且ツ整頭未
内一癡アリ四十六士ノ
ダ至ラス觀ルニ足ル者

余ノ江戸ニ游フ也一日
校友數人ト高輪泉岳寺
ニ詰リ始テ赤穂義士ノ
墓ヲ舞セリ當時ニ在テ
ハ寺甚ク壯麗ナラズ門
内一癡アリ四十六士ノ
木像アリ安ス然レビ粉飾
已ニ剝落シ且ツ整頭未
内一癡アリ四十六士ノ
ダ至ラス觀ルニ足ル者

泉岳寺拝赤穂義士墓記

センガクジハイスルアコウギシハカノキ

謝シ自殺スト云フ亦得
カタキノ士也又聞ク堀
部金九リ奉草席席二
既スヘキ者難ニ及ヒ父
既國ニ殉ス女節ヲ守
夫皆國ニ殉ス女節ヲ守
リ終ニ尼ト島リ泉岳寺

シ其故ノ隊長吉田兼亮
ノ族人ニ贈セト云フ辛
スル年八十三麻布曹連
寺ニ葬ル余亦甚ニ感
セリ後十餘年此記之作

泉岳寺の由来

江戸高輪泉岳寺は元々
徳川家康が外様田の地に
創建したものである。1

641(寛永18)年に家
康が高輪の地へ移転した
寺である。松平家徳川家
がより栄えるようにと萬
松山泉岳寺と名付けたと
いふ。

又山門に掲げている額
字は四国伊予松山の大野

約庵の書字である。
平成14.12.1 長野哲記

ヲ悉サズ後ニ其事劍氏
ナルヲ知ル也喜劍氏
大石良雄ニ始接逢ヒ
其復仇ニ志ナキヲ罵リ
大ニ悔辱ヲ極ム良雄死
モ聲色ニ見ハサス喜劍
氏後ニ其復仇ノ首士ク
ル聞キ憤激過チヲ悔
之甚而ニ至テ罪ヲ

行乃千復仇招末ヲ手鍼
テ死ヲ乞ヘモ報セス信行
ノ信行被三歸リ官三公告予告
ク信行被三歸リ官三公告予告
ク信行被三歸リ官三公告予告

ル者ハ寺坂信行ヲ加ヘ
テ之ヲ福スル也信行ハ
初仇ノ翌日良雄ノ命ヲ
以テ安葬ノ浅野長廣ニ
使シ其志ヲ成セラレ

又山門に掲げている額
字は四国伊予松山の大野

約庵の書字である。
平成14.12.1 長野哲記